

ヘンリー・ジェイムズ作品に見られるシャーロット・ブロンテの影響について

斎藤, 彩世
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/1560249>

出版情報 : 九大英文学. 56, pp.101-113, 2014-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



ヘンリー・ジェイムズ作品に見られる シャーロット・ブロンテの影響について

斎藤 彩世

1. はじめに

ヘンリー・ジェイムズはアメリカに生まれながらも、幼小の頃から人生の大半をヨーロッパで過ごした作家である。彼は 1869 年、26 歳のとき、青年期になって初めてのヨーロッパ旅行に赴き、自らの生きる場所がその地にあることを確信した。その後職業作家としてなんとか自立できる見通しがたったころ、もう一度ヨーロッパに渡り、33 歳でイギリスに定住することを決める。ジェイムズは、イギリスで実に多くの晩餐会に出席し、一晚に数件の家をはしごすることすらあった。また、イギリスへの愛着を深め、変わりゆくアメリカの都市やモラルに絶望したジェイムズは死の一年前、イギリスに帰化し、イギリス人としてこの世を去った。こうした伝記的事実が示すとおり、ジェイムズは確かにイギリスの生活をよく知り、愛してもいた。しかし同時に、レオン・エデルが指摘するように、ジェイムズは自らのことを「感傷的な旅人」あるいは「傍観するよそ者」と呼び続けており (Edel 276-78)、よくも悪くも完全なイギリス人にはなり切れていないことを自覚していた。

ところが、この自覚とは対照的に、ジェイムズ作品にはイギリス人の心情が、まるで生粋のイギリス人の感覚を通したかのように、こまやかに描かれている。確かにイギリスに定住する前の初期作品では、ヨーロッパを舞台にしながらも、アメリカ人の心情しか描けなかったが、中期には『カサマシマ公爵夫人』において、労働者階級のイギリスの人々を扱い始めた。この段階では、労働者階級の主人公が服を変えただけで貴族として通用する場面があるなど、ジェイムズにとっての階級観はぼんやりとしたものにとどまってい

るが、同時期に描かれた『ボストンの人々』と比較するならば、明確にボストンとロンドンを描きわけており、革命へと青年を導いた社会構造や心理を適切に描いていると言える。そしてついに中後期に至って、『ねじの回転』『ポイントンの蒐集品』『檻の中』を執筆し、下層中産階級の女性たちの階級意識を切実な筆致で描くことに成功した。さきほど述べたように、ジェイムズが究極にはイギリス人の内面を知り得なかったとすれば、どうしてこうも仔細に彼女たちの苦悩が描けたのであろうか。

そもそもジェイムズの創作は実体験よりも想像と観察に依るところが大きい。伝え聞いた逸話から、一人の人物の姿を想像し、その人物ならどのように行動するかという蓋然性を重視しながら、物語を構成していく。ツルゲーネフの影響を受けて発展させた、ニューヨーク版の序文にもくり返し描かれる、「萌芽」の構成法である。この習慣から、ジェイムズが想像力によって逸話を物語へと発展させていることがわかる。さらに、逸話を聞いたときにも想像力を働かせていると考えられる。人の内面について社交の場で詳しく、あけすけに語られるとは考えにくいことから、ジェイムズは逸話になった事件を元にイギリス人の心理を想像したと考えられる。これらの条件を考え併せると、公の場で明快に語られることのない人の内面は一しかも作者とは性別も年齢も社会的立場も異なる中産階級の女性の心情は—ジェイムズの実体験ではなく、「想像」によって知り得たものであるということが容易に予想される。さらに重要な点は、逸話を聞いてすぐに心理を想像できることから推察できるように、ジェイムズの読書体験がイギリス人の心理を想像する際の素地になっていた可能性である。先輩作家の著作のうちでもとりわけ、前述した中後期の貧しい女性登場人物群には、簡単に指摘できる物語の設定やモチーフだけを見ても、シャーロット・ブロンテ作品に登場するヒロインの影響が色濃く反映されている。

たとえば、ブロンテは『ジェイン・エア』でヒロインを若く、狭い世界でしか生きたことのないガヴァネスに設定したが、ジェイムズはそれを『ねじの回転』に活用している。また、『ジェイン・エア』では、ガヴァネスとマスターとの間に生まれる身分違いの恋が描かれるが、『ねじの回転』や『ポイントンの蒐集品』『檻の中』では、変奏した形で、この身分違いの恋が扱われる。

ブロンテはそれをプロットの推進力として用いたのに対し、主人公の視点そのものを作品の主題とするジェイズは、ヒロインの視点のゆがみの根源として、身分違いの恋を活用している。また、バーサ・メイソンという狂女は、『ねじの回転』のガヴァネスに姿を変え、「屋敷に火を放つ女」としてのバーサの姿は、『ポイントンの蒐集品』の結末で、不可解に、かつ、豪快に屋敷を包み込む炎に投影されている。また、『ジェイン・エア』に登場する、贅沢の好きな、バレエダンサーの娘「アデラ」は、間接的に男性のエゴイズムの犠牲になった少女であるが、『ポイントンの蒐集品』において、この少女にそっくりな年配の夫人が—豪奢な生活だけを愛し、夫と息子に不当に扱われた夫人が—やはり「アデラ」と名付けられている。また、ジェイン・エアは音楽の才能がない一方、絵画については天才的な技量をもつことが強調されているが、『ポイントンの蒐集品』のヒロイン、フリーダ・ヴェッチの主な特徴も、絵の才能であることが繰り返される。絵画はレディになるための教養として、多くの子女が学ぶものではあるものの、『ジェイン・エア』ではジェインの独特の画風が彼女の人格をよく示すものとして特徴的に扱われているし、『ポイントン』でもフリーダの生活苦と画才とが密接に関連する形で描かれるため、注目すべき類似点であるように思われる。

このように表面的なものだけを追ってみても、ジェイズ作品とシャーロット・ブロンテ作品に類似点が多いのだが、これは決して偶然ではない。ジェイズはシャーロット・ブロンテ論こそ書かなかったものの、彼女の小説を熟読し、賞賛していた。たとえば1875年『ネイション』への寄稿では、『ジェイン・エア』が記憶から拭い去れないほどすばらしい作品だと絶賛しているし (*Literary Criticism* I: 1230)、およそ10年後の1886年に『アトランティック・マンスリー』に掲載されたエッセイでは、ジョージ・エリオットと並べて、すばらしい作家であると紹介している (*Literary Criticism* I: 932)。死の一年前である1915年まで、シャーロット・ブロンテへの称賛は変わらなかったようで、同じく『アトランティック・マンスリー』に寄せた「ジェイズ・フィールズ夫妻にむけて」と題するエッセイでも、記事のタイトルであるフィールズ夫妻を回想する合間に、わざわざブロンテの小説の舞台となった場所についての回想を織り込んでいる (*Literary Criticism* I: 169)。ジェイズは、

ブロンテのヒロインをモデルに、現実の女性をタイプ分けしたこともあり (Autobiography 222)、彼女のつくりだすヒロインに深い関心を寄せ、よく理解していたことがうかがえる。そして、それらの貧しい女性像は、ジェイムズの想像の中で、作者であるシャーロットやその他のブロンテ姉妹の窮状と重ね合わせられ、ジェイムズは彼女たち全員の苦境が頭から離れないのだと情熱的に表現している (Literary Criticism II: 118)。こうしたことから推測すると、ジェイムズはかなりの関心をもって、ブロンテ姉妹、特にシャーロット・ブロンテの描いた貧しい女性を研究していたことがわかる。

ところが、このようにジェイムズの女性登場人物の造形に深くかかわっていたことが想像できるシャーロット・ブロンテ作品とジェイムズ作品との関係について、十分に論じた研究はこれまでなかった。¹本稿は、シャーロット・ブロンテ作品とジェイムズ作品の影響関係を、主に『ジェイン・エア』と『ポイントンの蒐集品』の比較によって実証し、どのようにして男性アメリカ人作家ジェイムズが、中後期作品群に登場する、イギリス人下層中産階級のヒロインを生みだすことができたのかを明らかにする試みである。

2. 贈与行為に込められた支配—被支配の関係

ノーマン・コリンズは 1932 年に早くも、『ジェイン・エア』が女性の権利を最初に宣言した小説だとし (Collins 180)、賛美する論考を発表した。その後、女性の苦悩や権利について、どのように描かれているのかを、有名な批評書『屋根裏部屋の狂女』の中でサンドラ・ギルバートがさらに細かく論証していくことになる。こうした批評を生み出す素地は確かに『ジェイン・エア』には見出せる。作品中には、暴力をふるう男のように、目に見えて女を虐げる男は登場しないものの、女性をいたわり、崇拜する男性のふるまいに、いかに女性を抑圧する要素が隠れているかを、ヒロインの気づきを通して暴

¹ 唯一の例外は、ウィリアム・ヴィーダーである。彼は、女性の手による大衆小説がジェイムズ作品に与えた影響について書き、注などにはジェイムズ作品とシャーロット・ブロンテ作品の比較をいくつか残した。しかし、このように、わずかに二者の関係について触れているものの、主な比較の対象は大衆性の顕著な小説群であり、ブロンテ作品とジェイムズ作品の関連を正面から取り上げ議論してはいない。

露していくという構造をもつ。そして、「優しい」男の隠れた残酷さに気づくヒロインは、ジェイズの『ポイントンの蒐集品』へと受け継がれている。

たとえば、上流階級の男性がヒロインに贈り物をする場面だが、贈り物のやり取りに込められた力関係について、シャーロット・ブロンテは意識的であったし、それをパロディ化するようにジェイズも自身の作品の中で意識して描いている。ジェイン・エアはくり返し、ロチェスター氏の傲慢さを、ときには直接相手に向けて、ときには心の中で非難するが、その非難の対象の一つが、彼の贈与行為である。結婚をすることが決まると、ロチェスター氏は再三ジェインに高価な衣装や装飾品を贈ろうとする。ジェインは本能的にそれを拒む。ジェインとロチェスター氏の贈り物をめぐる攻防は激しく、ロチェスター氏は憤りながらも、断られるほどジェインに対する征服欲を掻き立てられ、必死に贈り物を受け取らせようとする。ジェインには質素な服の自分がありのままの姿であると感じられるし、飾り立てることが宗教的にも階級的にも虚栄心につながると考える。さらに、神への冒瀆や階級転覆以上にジェインが気にしているように思われるのが、男性の富の力で自分の意に沿わない姿に変えられることである。彼女はそれが、男性に服従させられることと同じである、と本能的に察知している。ギルバートもすでに着目している点ではあるが(Gilbert 356-57)、繰り返しをいとわず引用しておきたい。ジェインに服を買うとき、ロチェスター氏は微笑むのだが、「その微笑みは、スルタンが、金や宝石で飾り立てた奴隷を愛でるときに見せるような微笑みだ」とジェインは考えている(310)。ロチェスター氏の贈与行為が愛情からくるものであることを理解しながらも、服を与えられる自分が彼の奴隷になってしまったと、冷え冷えとした感情をジェインは抱いている。

一方『ポイントンの蒐集品』でも、やはりオーウェン・ゲレスという有閑階級の紳士が、下層中産階級のヒロイン、フリーダに初めて恋愛感情を抱くとき、贈り物を無理に渡そうとし、ジェインとロチェスター氏との間に交わされた押し問答が繰り返される。オーウェンは、婚約者と母親の諍いを仲裁しようとしてくれるフリーダに惹かれ、「感謝の印」という名目で、彼女に贈り物をしようとする。彼は、本当は洋服を贈りたそうにしていたが、「私を保護しようとしている(patronize)と受け取られてはいけないし、私が貧しい

ことを指摘するようなものなので」困っているようだと、フリーダは考える(43)。この作品で我々が知り得るのはフリーダの考えだけなので、オーウェンが本当にそのような理由で服を贈る提案を取り下げたのかはわからない。ただしここで重要なのは、男性の求愛と、装飾品を贈るという行為が、セットで登場していることと、フリーダが、装飾品を贈ることと「保護する」ことを結びつけて考えていることである。

もちろん、これらの贈与行為には『ジェイン・エア』で「奴隷」という言葉が当てられているように、「愛人を囲う男」という不道德さもほのめかされている。ジェインの知らないことではあったが、ロチェスター氏には実はバーサ・メイソンという妻がいたし、フリーダは知っているのだが、オーウェンにもモナという婚約者がいる。ヒロインの道德性を読者に強調するためであろうか、『ポイントン』では、オーウェンは未婚の状態にとどめられ、不道德さがいくらか和らげられているし、フリーダが頑として贈り物を拒み、結局は6ペンスのピンクッションしか受け取らないと言う点でも、やはり不道德さが加減されている。しかし、有閑階級の男性が下層中産階級の女性を婚外恋愛に巻き込もうとし、金銭の力で愛情を示し、結局は女性の側が金銭と引き換えに体を売ることと変わらない関係を築こうとする点、この力関係に女性の側が気づき、控えめにはあるが抵抗するという点で、二作品の構造は共通している。

3. 火を放つ女たち

こうして虐げられた女性たちの怒りが「炎」で表現される点が第二の類似点である。バーサが起こした火事は男性に虐げられた女性の怒りを表すとする定説は妥当なものである。ロチェスター氏は、バーサが妻として「不適切な」ふるまいをしたために、彼女を無視し、閉じ込め、狂人だとみなすが、すでにジェインの目を通してロチェスター氏の傲慢さに気付かされた読者には、氏のエゴイズムこそが、正常であったバーサを狂気へと追いやったことに気づく。ロチェスター氏は、同じく金の力のみで支配しようとしたバレリーナに捨てられた際にも、相手の女性が「まともではない、はしたない浮気女」であったとして、一方的に非難する。バーサに対してもまったく同じ論

理で自らの正当性を語るため、読者はジェインと同様バーサに本来非がなかった可能性を知るのである。この点はシャーロット・ブロンテが巧みに描いた点であると言える。こうして、バーサは狂ったまま屋敷に火をつけ、結果的にロチェスター氏から財産と身体機能を奪い、まるで復讐を果たしたかのように描かれる。

一方、『ポイントンの蒐集品』でも結末に屋敷が火事で燃えるのだが、これは単に劇的な効果を狙ったというだけにとどまらず、作品のテーマと深くかわる事件である。この火事があまりにも作品のそれまでの流れを覆すものであるために、多くの解釈が試みられ、いくら考えても不可解であるために、いまだに解決を見ていない。この重要な火事であるが、確実に指摘できる事実だけを取り上げるならば、ヒロインであるフリーダが間接的にかかわった火事ということになる。フリーダがもしオーウェンの早まった求愛に応じていれば、婚約者モナから妻の座を奪うことができ、審美眼をもつフリーダが女主人として蒐集品を適切に管理すれば火事は起きなかった。ところが、フリーダは頑なにオーウェンの求愛に抵抗した。その求愛を受け入れれば、彼女も、彼女を大事にしてくれたゲレス夫人も、愛するオーウェンも皆幸福になるにもかかわらず、下層中産階級の女性のモラルが上流階級の人々に少しも気にかけていないことや、同じように軽々しく扱われてしまう女性、モナの心情が、どうしても気にかかったのである。

もう少し、この点に関して説明しておきたい。ステファニー・フットが指摘するとおり、下層中産階級のフリーダも、新興成金のモナも、有閑階級との関係で見れば危険な立場は同じであり、どちらも搾取される対象となり得る (Foote 48-49)。小説中モナの気持ちを気にかけるのがフリーダだけである点を考えてみても、二人の立場の近接性が明らかになる。フリーダとオーウェンの間には階級差があることから、オーウェンに言い寄られることで非難を受けるのはフリーダである。フリーダは「紳士をたぶらかす俗悪な身分の低い女性」という汚名を着せられてしまう可能性が高い。気のいいオーウェンは実に無邪気にフリーダの無実を訴え、悪いのは自分だとヒロイックにふるまうであろうが、世間が自分を潔白だとは考えないことをフリーダはよく知っている。つまり、オーウェンは自分の気に入らなくなった女性を追い払

うのに、別の女性の社会的評判を犠牲にしていることになるのである。フリーダはオーウェンを愛しながらも、この隠された残酷さによく気づいているからこそ、男性の移り気で簡単に捨てられてしまうモナの気持ちが気になったのではないだろうか。

こうして女性の立場を守ろうとしたフリーダの行いによって、オーウェンとモナは約束どおり結婚することになり、審美眼を持たないモナが選んだずさんな召使いによって、蒐集品を納めた屋敷に火がついてしまうのである。簡略化して言い直すならば、フリーダによる、ささやかではあるが、きつぱりとした、女性の権利の主張が、屋敷の火に結びつき、男性の財産の一部を奪ったのである。この点でバーサの火がフリーダの火に重なる。細かいところまで挙げればきりがないので紙幅の都合上割愛せざるを得ないが、女性として苦境に立たされたフリーダとモナがまるで協力して火事を起こしたかのようになり、『ジェイン・エア』においてもバーサの火は、冒頭からジェインの火に重ね合わせられている。ジェインは幼小の頃から、男性とのかかわりの中で怒りや激しい衝動を覚えるが、それらがことごとく「火」で表現されている。「火」のイメージが頻繁に繰り返され、本作品の解釈の鍵となっていること自体はデイビッド・ロッジがすでに指摘しているとおりであるが（131）、本稿では加えて、火を放つ二人の女バーサとジェインが同じ利害関係にあることを指摘しておきたい。こうして、女性の抑圧と怒りが火で表現される点でも、ジェイムズ作品とシャーロット・ブロンテ作品の関連性は高い。

4. 赤い部屋と相続

第2節では、恋人であるマスターとヒロインとの関係に焦点を当てて、無自覚な男性中心主義について議論したが、この節では、さらに広く男性登場人物と女性登場人物の力関係について考えていきたい。『ジェイン・エア』と『ポイントン』の類似点として、「赤い部屋」と「相続」が挙げられる。ジェインが幼いころ閉じ込められ、初めて心の底から制御できない怒りがわくのを感じた場所が赤い部屋であるが、それは亡くなったリード氏の部屋であった。その部屋で掻き立てられたジェインの怒りと、父から息子へと受け継がれる相続の男性中心主義とは密接に関係している。一方、『ポイントン』の蒐

集品も家長に相続されるものであり、その相続が原因で女性登場人物たちは苦しめられることになるが、その蒐集品が納められている部屋も赤い部屋と呼ばれる。二作品において、この点ではどのような類似が見られるのかを以下で詳しく議論したい。

ジェイムズの『創作ノート』によれば、『ポイントンの蒐集品』の創作にあたっては、ゲレス夫人という女性が代表する「イギリスの母親」への同情が大きな役割を果たしているようだ（*Notebooks* 136-37）。ジェイムズは、1896年にこの作品を執筆したにもかかわらず、わざわざ14年以上も時代を戻し、1882年の既婚女性財産法成立前を作品の舞台とした（*Rhoads* 148）。この法律以前は夫婦の財産はすべて夫の物となるため、財産を奪われ苦しめられる女性が多く、ジェイムズは、こうした問題に関心があったのだ。²ゲレス夫人は世界中を飛びまわり、貴重な芸術品を苦勞して蒐集した。そして蒐集品こそ人生そのものだと感じていた。しかし、夫のほうでは夫人の情熱を理解していなかったらしく、何ら特別な対処もしないまま、すべての財産を息子に渡してしまう。夫人はオーウェンが許可してくれなければ、蒐集品には近づけない立場に置かれるが、価値がわからずとも自分の財産としてそれらを所有しておきたいオーウェンは、結婚を機に夫人を蒐集品と屋敷から遠ざけてしまう。夫であるゲレス氏は、夫人が息子から蒐集品を「奪われる」ことは容易に想像できたであろうに、それが問題だとも思わなかったようである。あるいは、息子の善意でなんとかしてくれるだろうという期待によって、夫人の運命を不確かなものに託してしまう。こうした相続をめぐるイギリス人女性の苦境が『ポイントン』を支える重要なテーマとなっている。追いつめられたゲレス夫人は、息子を前に、赤い部屋で激しく泣き、叫び続ける、「蒐集品は私たち夫婦の宗教だった、私たちの人生だった、私たちそのものだった！でも今は私だけになってしまった」（20）。実際に、法律的に所有できない蒐集品であるにもかかわらず、「私」の所有品であると主張し続ける夫人は、自分と蒐集品を一体化させることで、その自分を解体しようとする男性や法

² 既婚女性財産法は、制定されたのは1870年であるが、法として確立されたのは1882年であった（ミレット 136）。

律への抵抗を試みている。

一方『ジェイン・エア』でも相続は重要なテーマであり、ジェインをはじめ女性たちは相続に翻弄される。ジェインはきちんとした相続が成立していれば、つらい家で幼少期を過ごし続けることも、貧しい寄宿学校へやられることも、家庭教師をすることもなかった。ジェインの相続が適切になされなかったのは、男性中心主義の法律のせいであるとは言えない面があるものの、ジェインの相続を妨げた養母のリード夫人は、遺産相続のもう一人の犠牲者であり、彼女の苦境が間接的にジェインの自由を奪ったのである。リード夫人は、遺言によって財産を受け取ったところは幸運であったが、それだけでなく、望まない子どもまで押しつけられてしまったのである。押しつけられた子どもである幼少期のジェインから見た冷酷なリード夫人は、おとぎ話の継母そのものであり、読者もリード夫人の冷酷さを疑わないが、大人になったジェインの視点を通して、次第に何が彼女から優しさを奪ったのかが明らかになる。夫人は最初からジェインを嫌っていたわけではなかった。夫がある日突然妹の子どもを連れてきて、次第に実の子どもより優遇するようになり、夫人にもそうするように強制したため、本能的に実子を守ろうとしてジェインにつらく当たるようになるのである。夫の死後、ジェインを親戚の手に渡すことになれば不満は解消されたであろう。しかし実際には、ジェインを実子と同じように育てることを命じるリード氏の遺言によって、夫人は望まない子どもの養育を強いられる。このようなわけで、だんだんと不満をため込んだ夫人は、ついに念願かなって親戚がジェインを引き取りに来たり、財産を贈ろうと申し出たりしたときにも、ジェインを幸せにさせないためだけに、これらの申し出を拒絶するのである。したがって、ジェインもリード夫人もリード氏の遺言に苦しめられたことになる。また、リード夫人はジェインに舞い込んだ幸福を退けた代償に、死の床まで罪悪感に苦しめられるが、同時にジェインを愛そうと思っても、どうしても拭い去れない嫌悪感に気づき、悩まされる。これらの苦境はそもそも、夫人が夫の中に漠然とではあるが、自らの血筋を優先し、それを妻にも強要させようとする男性優位主義を感じとったことによるものではないだろうか。

もちろんリード氏は両親を亡くしたジェインを不憫に思い、自分がかばう

ことで家庭内での安全を確保してやろうと思った可能性は高い。しかし、そうした温かい感情にリード夫人への抑圧が潜んでいたことを、保護される側であったジェインの語りが示唆している。ジェインは義理の兄のジョン・リードに虐待され続けていたので、たった一度だけ仕返しに暴力を振るってしまうが、そのことでお仕置きとしてリード氏が亡くなった赤い部屋に閉じ込められる。ジョンもリード夫人もジェインにとって恐ろしい存在だが、だからといってリード氏に助けを求める気にはならない。彼はどこか恐ろしいのである。ジェインは自分が泣いていたら「なぐさめてくれるリード氏の幽霊の声をきけるかもしれないし、暗闇からぼんやりと白く光るリード氏の顔が現れ、同情を示してくれるかもしれない」と考えるものの、もしそれが実現したら「ひどく恐ろしい」に違いないとも確信する(20)。唯一の味方だとジェインが思ってもおかしくないリード氏は、不気味な幽霊としてしか想像されておらず、いくら彼が同情を示してくれても、そこには空恐ろしいものがあると子どもながらにジェインは察知している。このあたりのブロンテの語りの操作は実に巧みである。前述した、大人になってからのリード夫妻の関係についての回想―夫が妻に臨まないことを強制し一生苦しめたという回想の直後に、「純真な」子どもが感じた「恐ろしい」リード氏の印象が続いている。そして、その後ジェインは恐怖のあまり、かの有名な叫び声を上げ続け、失神するのである。この叫びと制御できない感情は、男性の抑圧に対してジェインが初めて示した反応であると考えられる。

こうして、『ポイントン』においても『ジェイン・エア』においても、赤い部屋と相続を通して、男性中心主義の法律がいかに女性登場人物を苦しめているかを描いている。ここには単一の夫婦だけでなく、二世代に渡る男女―ジョン・リードと故リード氏、オーウェン・ゲレスと故ゲレス氏や、リード夫人とジェイン、ゲレス夫人とフリーダやモナーがかかわっている。一組の男女の支配―被支配の関係が、他の組の不幸を引き起こす、網の目のような負の連鎖の中心地として描かれるのが、この赤い部屋なのである。また、相続に苦しめられる女性たちが、まさにこの部屋で自らの虐げられた状態に気づき始めることも、重要な点である。両作品に共通して、女性の苦境と気づきの場としての「赤い部屋」と「相続」が登場することからも、ジェイムズ

がいかに『ジェイン・エア』の本質を理解していたかがうかがえる。

5. おわりに

ジェイムズは、特に中後期作品において、下層中産階級の女性の階級意識や道徳意識などを、まるで実際に自分が同じ性別で同じ身分の生活をしたことがあるかのように、細やかに描いた。第2節で論じたように、自分の愛する上流階級の男性の「優しい」ふるまいに、支配欲を垣間見る下層中産階級の女性の感情を、ブロンテ同様ジェイムズも緻密に描いている。また、第3節で論じたように、女性たちの、抑圧に対する怒りや抵抗を表すとき「火」のイメージが効果的に用いられる点でも、ジェイムズはブロンテの影響を受けている。さらに、第4節で論じたように、女性の怒りは、単にヒロインとその恋人のレベルにとどまらず、作品に登場する何世代もの男女間に起こり得るものとしてブロンテはとらえている。なおかつ、その女性の苦しみが男性優位の遺言や相続と関連するものであることも描いている。これにならって、ジェイムズも蒐集品を納めた赤い部屋に、「男性を保護する相続によって苦しむ女性」という構図を持ち込み、グレス夫人のセリフによって、男性中心主義の残酷さに対する女性の気づきを描いている。その気づきは、ブロンテがジェインの回想や叫びによって表現したものと同じものである。

以上の議論が明らかにしたとおり、ジェイムズの『ポイントンの蒐集品』と『ジェイン・エア』は表層にとどまらず、深いところで同じテーマを共有している。紙幅の都合上詳しい比較は割愛しなければならないが、『ねじの回転』の冒頭で田舎から出てきたガヴァネスが、古い屋敷に何かいるのではないかと恐怖を感じる場面の描写と、『ジェイン・エア』でジェインが初めてロチェスター氏の屋敷に住みこむことになったときの同様の恐怖を扱う場面は、驚くほど似ている。このガヴァネスの恐れは、物語を動かす軸となるものであるので、この点でも作品の根幹にかかわるところでブロンテ作品が活用されている。また、結婚適齢期を過ぎた未婚女性についても、ジェイン・オースティンが描いたようなこっけいな姿とは違い、ブロンテとジェイムズは新しい独身女性像を生みだしている。これらの点に関して、詳しい議論は別の機会に譲らねばならないが、ジェイムズはたしかにシャーロット・ブロンテ

作品を読むことで、性別も身分も国籍も違う女性たちの気持ちを理解し、中後期作品の傑作を生み出したのである。

引用文献

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. London: Penguin, 2006. Print.
- Collins, Norman. “The Independent Brontës.” *The Facts of Fiction*. London: Victor Gollancz, 1932. Print.
- Edel, Leon. *The Life of Henry James: The Conquest of London: 1870-1881*. New York: Avon Books, 1978. Print.
- Foote, Stephanie. “Henry James and the Parvenus: Reading Taste in *The Spoils of Poynton*.” *Henry James Review* 27.1 (2006): 42-60. Print.
- Gilbert, Sandra. “A Dialogue of Self and Soul: Plain Jane’s Progress.” *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Ed. Sandra M. Gilbert and Susan Gubar. New Haven: Yale UP, 1979. Print.
- James, Henry. *Autobiography*. Ed. Frederick W. Dupee. Princeton: Princeton UP, 1956. Print.
- . *Literary Criticism*. 2 vols. Ed. Leon Edel. New York: The Library of America, 1984. Print.
- . *The Notebooks of Henry James*. Ed. F. O. Matthiessen and Kenneth B. Murdock. New York: George Braziller, 1955. Print.
- . *The Spoils of Poynton*. New York: Oxford, 2008. Print.
- Lodge, David. *Language of Fiction*. London: Routledge, 1984. Print.
- Rhodes, Bonita. “Henry James and the Plunder of Sentiment: Building the House of Modernism from *The Spoils of Poynton*.” *Henry James Review* 33.2 (2012): 147-64. Print.
- Veeder, William. *Henry James—the Lessons of the Master: Popular Fiction and Personal Self in the Nineteenth Century*. Chicago: U of Chicago P, 1975. Print.
- ケイト・ミレット『性の政治学』藤枝滯子、横山貞子、加地永都子、滝沢海南子訳、ドメス出版、第4刷、1993年。